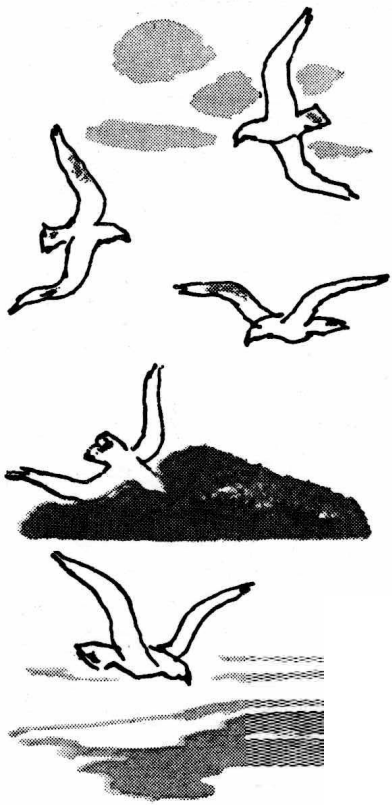
叱られ京太

本間芳男・作　松井行正・絵

叱(しか)られ京太



N. D. C. 913／256P／22cm

新少年少女教養文庫　47

叱られ京太

1972年1月31日　第一刷発行

定 価　650 円

著　者　　本間芳男 ©

発行者　　牧　芳枝

発行所　株式会社　牧 書 店

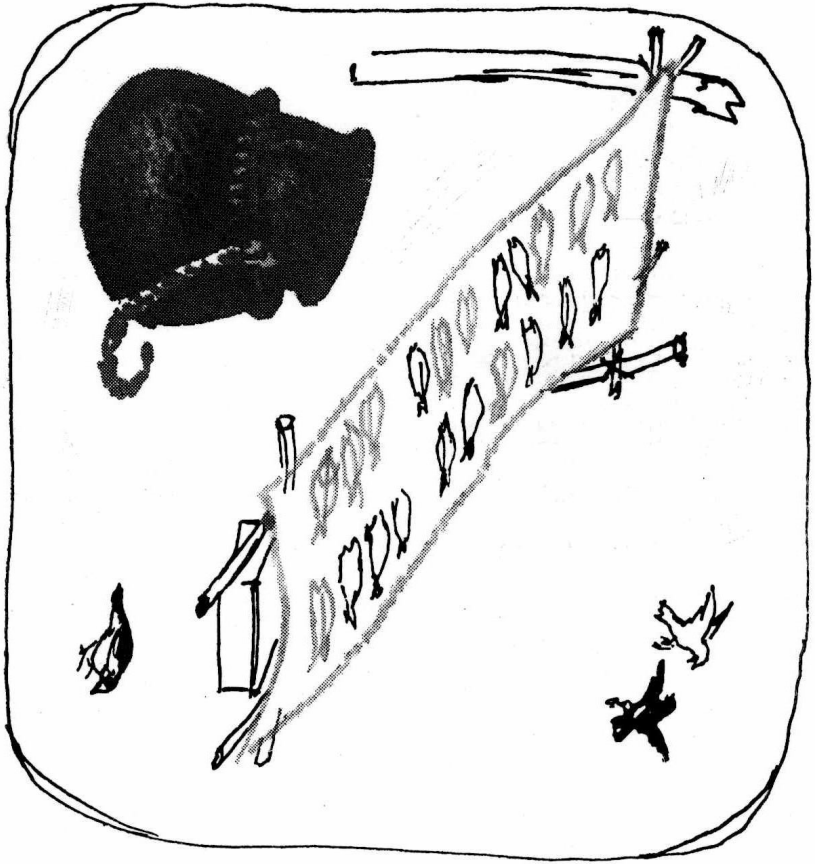
東京都新宿区揚場町1

電話(269)2081～4　振替東京　196483

印刷所　東洋経済印刷K. K.

製本所　ナショナル製本所

(分) 8393　(製) 06047　(出) 7909



0の章　話は0で坊九房のかめ　135
7の章　野ぎくの上をいく京太　140
6の章　カニ船に乗る京太　150
5の章　くさったさかなを投げる京太　176
0の章　話は0で黒いとり　183
3の章　叱られ京太大屋根の悪党　201
2の章　叱られ京太浜辺の狂人　216
1の章　叱られ京太林の放火魔　234
0の章　真実は永遠に

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

0の章

物語のはじめに

今から、和泉京太という、ごくあたりまえの、どこにでもいそうな男の子を主人公にして、物語をはじめます。

題名は、「叱られ京太」。

まず、話のはじめに、物語のあらましについて、説明してしまいましょう。

〝時〟は。

現代の物語です。

現代のある時から、ある時までの十六年半のできごとです。ある時とはいつか。十六年半とはどういう意味なのか。それは、あとの機会にゆっくり説明することにして……。

〝所〟は。

新潟県の角見浜です。

角見浜を地図の上で、説明しましょう。日本列島を、椅子に腰かけた応接間のお客さまにたとえ

るなら、そのみぞおちのあたりに新潟県があります。新潟県の、長い海岸線のちょうどまん中あたりを、指でおさえてみてください。そこが角見浜です。

角見浜の西側は、佐渡のよく見える日本海になります。東側には、新潟平野が広がっています。しかし、地図をよく見ると、海岸山脈が南北に走っているでしょう。だから、角見浜の東側は、海岸山脈——五百メートルほどの角田山が見えます。浜は、海と山とにはさまれ、三日月型に南北にのびています。この漁村が、物語の舞台となります。

〝登場人物〟は。

主人公は、冒頭に話した和泉京太です。

この主人公の左手のひらには小さなほくろがあります。

物語はこの男の子を中心にすすめる予定です。

京太が生まれてから、いや、正確にいうなら、彼の生まれる四年ほど前から、彼が小学校六年生のある秋の夜までを、「わたし」の口から語らせてもらいます。

もちろん長い物語ですし、主人公ひとりでは生きられるはずがありませんから、登場人物は、ほかにもたくさんいます。彼の両親、友人、近所の人などです。

以上、わたしはこの物語の時、所、登場人物について、簡単にふれました。しかし、これだけでは、とおり一ぺんですので、物語の骨組みを知っていただくために、主人公のことについて、少し詳しく話をすすめてみましょう。

和泉京太は、角見浜の漁師の子として生まれます。

父親は、和泉和男。しかし、本名はめったに使われず「和平どん」という昔からの屋号で呼ばれる場合が多いのです。和平どんといえば、和泉和男自身であり、また和泉家全体をさす場合もあります。母親は、和泉康子。二人は、愉快な夫婦です。彼、京太は、和平どん夫婦のひとり息子というわけです。

京太は、ごくあたりまえの、どこにでもいそうな男の子だということは、最初に話したとおりです。

子どもというものは、京太にかぎらず純粋で、善良な動物なのです。同時にまた、子どもほど自分勝手で、自分中心で、そのためにはどんな悪ぢえでもはたらかす動物は、ほかにありません。

不思議なもので、子どもというものは、善意と悪意とを、同時に持っているややこしい人間なの

です。

おとなどは、善人か悪人か、もうどちらかに決まってしまった製品みたいなものです。それにくらべ、子どもは堂々と善悪をこんがらがったまま持っている、製品になる前の原料のようなものです。

わたしは、そう考えるのです。

それが普通の、あたりまえの、どこにでもいる少年と、考えているのです。

京太も、そういう少年です。

この物語は、京太がすばらしい才能を持っていてなにかをするとか、英雄になるとか、――そういうものじゃなく、ほんの平凡な少年の物語なのです。

さて、平凡な少年の和泉京太。

平凡なのですが、彼の場合、なんとなく運の悪い男の子なのです。

三歳になったとき、赤ちゃんコンクールの予選で一等賞を取ります。県の決勝大会に出たら、おそらく上位入賞と思われたのに審査の日、肺炎を起こして棄権をしてしまいます。

どこか、タイミングがはずれるのです。

小学生が階段を降りるとき、いつも先生に注意されるでしょう。

「手すりをまたいで、すべり降りてはいけません。」

と。しかし、あれは誰でもやってみたいものです。友だちのひとりが、宇宙飛行士になったつもり

で、両手を広げてすべり降りるのを見て、京太も、ついにやってしまいます。手ばかりか、足もぴんとはねて、おなかだけですべり降ります。

そんなとき、先生に見つかるのは、決まって京太なのです。

先に降りた宇宙飛行士は、うまく体育館まで逃げるのに、彼だけが廊下に立たされてしまうのです。ひどいときは、こつんとやられます。

よくある話です。

宿題をしていかなかった日にかぎって、先生のご機嫌が悪いのです。朝早く起きて、パンツ一枚のまま寝床で宿題をして、朝ごはんを食べる時間もなく、自信満々で登校した日にかぎって、先生は宿題を調べないのです。

数えあげたら、きりがありません。

海水浴場の飛び込み台の上で、つっ立っている少年がいます。後ろ姿が仲良しの友だちに似ています。ようし、おどかしてやれ、と思って、後ろからそっとおして、じょう談のつもりで、

「あ、あぶない。」

と、からだを支えます。だが、ふり返ったその少年の顔は、彼の友だちではなくて、まったく見も知らない子なのです。

そんなときの、気まずさ。

どういうわけか、和泉京太という少年は、そういうことの連続の、連続なのです。

町へいくのに、どうしても九時半のバスに乗らなければならない、とします。京太は遅れてはいけないと思って停留場まで走ると、十秒差で、バスは発車してしまうのです。彼はくやしがって、歩こうと決心します。それで百メートルも歩くと、後ろから定期バスが彼を追い越していきます。

「ちえっ、前にいったのは、観光バスか。」

それでも彼は真剣に、汗だくになって、峠を越えて、町まで歩きます。

自分の足で、あえぎながら町まで歩くのなら、それでいいのです。彼のタイミングの悪さ、間の悪さが、ときには、他人に迷惑になる場合が多いのです。

飛び込み台で、友だちだと思ったその少年が、知らない人で、それがまた、まったく泳げない人だとしたら、どうなるでしょうか。

運の悪いことに、からだをしっかりと支えたつもりなのに、その少年は海の中へ落ちてしまうのです。

音楽会で、合奏をするとき、彼は楽器を演奏するのが不得意なので、シンバルを持たせられます。たった一か所だけ、思いきってシンバルをたたくのに、長い音楽の中で、たった一か所なのに、大切なときに、じっと、そのときを待っていたのに、彼のほっぺに蚊が飛んでくるのです。

そのため、彼は半拍、遅れてしまうのです。

京太のじょう談が、誠意が、ときには他人から憎まれたり、叱られたりする羽目になり、どこかで悪意にすり変わり、彼自身がとまどうのです。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

いつか、この少年には、
「叱られ京太」
というあだ名がついてしまいます。
小学校の先生は、彼のことを小学校はじまっていらいの悪童だといいます。
無理もありません。京太は一年生になったばかりで、女の子を倒して鼻血をださせてしまいます。五年生の秋、裏山の杉林に放火しようとします。まったく、手に負えない悪童ということになります。
村の人は、彼を泥棒呼ばわりします。
赤ん坊のとき、岩崎商店から段ボールの箱に、二つも食料品を盗んだからです。
まったく、手のつけられない男の子だということになってしまいます。
岩崎商店の品物を盗んだので、母親は強く彼を叱ります。するとまだ幼児のくせに、彼は家出をしてしまいます。
まだあります。
父親が病気になったとき……。
――え。
それでは、単なる悪童物語だって？
それが、違うのです。どう説明したら良いか、わたしには、良くわからないのです。

――それに。

物語のなかみを、全部話してしまったら、あとが、おもしろくなくなるって？

だから、今、こうして話していることは、彼の表面だけのことなのです。彼の本当の姿は、村の人たちがいうほど悪童ではないということを、彼の人生の間の悪さが、人びとの誤解を招くということを、わたしは話したいのです。

――なに、わたし？

そうでしょう。さっきから話し続けている「わたし」とは、いったい誰なのか、気になるのも無理ありません。

京太のことについて語るわたしは、もちろん彼の両親や先生や友人ではありません。この物語に、京太と話の良くあう大村京介というおじさんも登場しますが、その人でもありません。

残念ながら、わたしは、人間ではないのです。人間なら、京太をどんなに理解していても、彼の悪童ぶりに結局は腹を立てる結果になりましょう。

真実というものを、本当の彼というものを人間は知ることができないのですから。

わたしのこれから語ろうとするのは、京太の真実の物語なのです。

人間でないとすると、彼の飼っている犬か小鳥か。動物――そうでなければ植物。彼の家の大きな松の木か、庭のニセアカシアか――。

ちょっと、待ってください。

わたしの正体については、いずれあとで話しましょう。
京太の話にもどします。
彼は他人に誤解されやすい少年なのです。決して彼の真意には、他人がいうほど悪意はないのです。その彼が、誰からも相手にされず、ひとりぼっちになっていきます。ひとりぼっちになったとき——。
おとななら、他人を憎みます。
子どもである京太は、あたりまえの子どもである彼は、ひとりぼっちになっても、それでも他人のためになろうとします。
そして、その善意が、努力が、また他人を傷つけていく悪循環となるのです。
外側だけから和泉京太を見たら、徐々に不良になっていく少年としか考えられません。
彼の本当の姿、彼の内側にある人間の善意は、わたしにしか、わからないのです。
彼の両親にも、彼自身にもわからないものを、わたしだけが知っているのです。
というとまた、「わたし」とは誰か、と聞きたくなるでしょう。
神さまか。
なるほどわたしは、京太少年が起きているときもねむっているときも、彼のことならすべてを知っています。いや、彼自身の知らないことでも見とおすことができるのです。彼の生まれる以前のことまでもわかります。彼が生まれる前から、彼の左手のひらにはほくろがあるということさえ

も、知っているほどですから。
しかし、神さまではないのです。
落ちついて、あせらずに聞いてください。わたしが神さまではないという証拠だけは、聞いてもらいましょう。
和泉京太は、わたしが生まれてから、四年半後に生まれます。
十二年後に、小学生になります。
十七年目の秋、六年生になっている彼は、海の見える岬の上から、星空を仰ぎます。
空にむかって、泣くのです。
秋の、月の明るい、お祭りの夜——そのときまでの和泉京太しか、わたしにはわからないのです。
その夜から、彼はどんな少年に成長し、どんなふうに成人するのか、わたしにはまったくわからないのです。
わたしというものが、もし神さまであるなら、この少年の未来についても予言することができるでしょう。
わたしには、それができないのです。
なぜなら。
ちょうどシンデレラ姫が、十二時までに宮殿を出なければならなかったように、わたしにも時間

の制限が与えられているのです。その制限された時間は、十六年半。十六年半がわたしの生命なのです。

わたしの見た十六年半のできごとを、和泉京太を中心に語るわけですが、ちょっと物語のあらましに深入りをしすぎたようです。

まだ、わたしの正体を語るのに、早すぎるような気がします。今のところ、わたしのことを忍者だとでも思っていてください。

忍者の語る和泉京太。

この物語をはじめる前に、両親にも京太にも知らない重大な秘密を話しておきましょう。

実は、京太の本当の父親は、和泉和男ではないのです。本当の母親は、和泉康子ではないのです。和平どんのひとり息子ではないのです。

では、誰が、本当の両親なのでしょう。

なぜ、そんなことが、世の中にありえるのでしょうか。

――わたしの話を、聞いてください。

16の章

七月七夕の海に

わたしの生命が消えるときは、前にも話したように、京太が六年生になった秋の夜のことです。

その日から数えて十六年前の七夕の夜。

もちろん京太は、まだ生まれていません。

山と海にはさまれた角見浜は、月の光に白く浮き出ていました。その砂地に三つの影法師が映っていました。

背の高いのは、父親の大村京介。

ゆかた姿のは、母親の大村道子。

あいだにはさまって、両手をつないでいるのが三歳になったばかりの大村祐子です。

祐子の白い顔が、ときどき母親を見あげて、

「おかあ、ちゃん。」

と、白い歯をだして笑います。長い髪が、片一方の肩にかかって、大きな目があまえています。

「小さな、小さなお話よ。」

若い母親は、祐子の左手を自分の左手に取って、右肩を支えて話し続けました。

「一番小さな虫は、雪むし。花の実ならほうせんか。」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com